

ふくしまレッドリスト（2024年版）見直しの理由

番号	生物群名	目名	科名	和名	学名	ふくしまRL2022 (旧) カテゴリー	ふくしまRL2024 カテゴリー	見直しの理由	参考文献 (別紙一覧)
1	昆虫類	甲虫目	ゲンゴロウ科	チョウカイクロマメ ゲンゴロウ	<i>Platambus ikedai</i> (Nilsson)	準絶滅危惧	絶滅危惧 I I 類	2012年に鮫川村で発見され（平澤ら, 2013）, 続いて只見町からも発見された（吉井ら, 2015）。人工池からの流出部であった只見町の生息地は, 人工池の整備に伴い生息地の細流は消滅し, その後の生息確認は出来ていない。一方, 南会津町では新たな生息地が発見され, 個体数も多い。鮫川村の生息地は植生遷移が進み, 流れは伏流水としてのみ存在している。このようにこの生息地は不安定な水域であり, 周辺の整備で生息地が消滅する可能性が高い。また, この生息地は耕作放棄された休耕田の最上部でもあるため, 流れが確認できない状態となっている。 絶滅危惧 I I 類の定性的要件, 「大部分の生息地で, 生息条件が明らかに悪化しつつある」, に該当する。	平澤 桂・吉井重幸・三田村敏正 (2013) 福島県初記録のゲンゴロウ科2種, ふくしまの虫 (31): 1-3. 吉井重幸・平澤 桂・三田村敏正 (2015) 福島県産ゲンゴロウ目録50種, ふくしまの虫 (33): 20-29.
2	昆虫類	甲虫目	ミズスマシ科	コムズスマシ	<i>Gyrinus curtus</i> Motschulsky	情報不足	絶滅危惧 I 類	生息環境は平地から丘陵地の池沼、水田、河川の淀みとされるが（環境省編, 2015）, 近年本種が確認された場所の多くは流水環境である（渡部・吉村, 2020; 塘・柴田, 2024）。本種は透明度が高く水質の良い流水域に生息するものと思われる（渡部・吉村, 2020）。清冽な流水環境に加えて, 産卵基質となる水生植物, 幼虫が蛹化するために上陸可能な水域と陸域の連続性, 蛹化するための土壌, 餌となる豊富な水生生物など, 個体群の維持には多様な要素が必要である。 2023年, 会津若松市で生息地が発見された。過去に西郷村（大桃, 1988）, 白河市, 棚倉町, 白河市（旧大信村）（水野谷, 1999）の記録があるが, オス交尾器による種同定がされていない可能性が高いこと, 記録された場所は本種の生息環境とは異なることから, 過去の記録は誤同定の可能性が高いと考えられる。2023年の調査によって生息環境等が明らかになり, 過去の記録の見直しも進んだ。県内の既存の生息地は1ヶ所と生息地が局限されており, 個体数は多いものの, 生息地にはアメリカザリガニが多数生息しており, 生息条件は著しく悪化している。 絶滅危惧 I 類の定性的要件, 「既知のすべての生息地で, 生息条件が著しく悪化している」, に該当する。	水野谷昭三 (1999) 中通り南部の水生甲虫について, ふくしまの虫, (18): 64-68. 大桃定洋 (1988) 県南地方の甲虫分布資料 (その2. 水生食肉亜目), ふくしまの虫, (7): 13-15. 塘 忠頭・柴田史音 (2024) 福島県天然記念物「白山沼のイトヨ生息地」の底生動物相-福島県におけるコムズスマシの記録-, 福島大学地域創造, 35(2):**-**. 渡部晃平・吉村優杏 (2020) 滋賀県におけるコムズスマシの追加記録および生息環境, SAYABANE N. S., (39): 20-23.
3	昆虫類	カメムシ目	ミズムシ科	ミゾナシミズムシ	<i>Cymatia apparens</i> (Distant)	準絶滅危惧	絶滅危惧 I I 類	池沼や湿地に生息するが, いずれの生息地でも個体数は少ない。福島県内での記録は浜通りが中心で, 相馬市光陽三丁目の湿地は高密度で本種が生息する多産地であったが（三田村, 2009）, 埋め立てにより消失した。また, 白河市南湖公園でも確認されているが（三田村・吉井, 2008）, 最近では確認されていない。これ以外の生息地での個体数は多くない。一方, 東日本大震災の津波跡地では南相馬市小高区（平澤ら, 2023）, 双葉町（三田村, 2018）など各地で本種が確認されたが, その後の復興工事等により南相馬市の一部と双葉町の生息地は埋め立てられた。2023年の調査では松川浦で1頭のみ確認されているが, 安定的な生息地とはいえない。現段階でいずれの生息地でも個体数の減少や環境の変化が見られる。 絶滅危惧 I I 類の定性的要件, 「大部分の個体群で個体数が大幅に減少している」, 「大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある」に該当する。	平澤 桂・三田村敏正・吉井重幸 (2023) 第5節 トンボ目, カメムシ目, コウチュウ目 (水生), 小高の自然調査報告書, 109-118. 三田村敏正・吉井重幸 (2008) 白河市南湖公園の水生昆虫-2007年の調査結果一-, ふくしまの虫, (26): 1-4. 三田村敏正 (2009) 浜通り北部におけるミゾナシミズムシの採集記録, ふくしまの虫, (27): 33-34. 三田村敏正 (2018) 東日本大震災の津波跡地における水生半翅類相の変化, 水生半翅類の生物学, 119-129, 北隆館, 東京.

4	昆虫類	カメムシ目	ミズムシ科	ミヤケミズムシ	<i>Xenocorixa vittipennis</i> (Horváth)	準絶滅危惧	絶滅危惧 I I 類	福島県内での記録は、新地町と相馬市の2カ所のみであり(三田村ら, 2013), そのうち相馬市の生息地は埋め立てにより消失している。現時点での生息地は新地町の溜池1ヶ所のみであり, この溜池はヨシや水生植物が豊富なため, 生息個体数は多いものの, コイやウシガエル, ミシシッピアカミミガメなどの外来種が極めて多く, 今後, 捕食等による減少も危惧されるなど, 生息条件が明らかに悪化している。また, 近隣の溜池には生息していない。 絶滅危惧II類の定性的要件, 「大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある」に該当する。	林 正美・宮本正一(2018)カメムシ目(半翅目) Hemiptera. 川合禎次・谷田一三編, 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版, 東海大学出版部, 平塚。 三田村敏正・吉井重幸・平澤桂(2013)浜通り北部におけるミヤケミズムシの記録, ふくしまの虫, (31): 58.
5	昆虫類	甲虫目	ホソガムシ科	バンダイホソガムシ	<i>Hydrochus mitamurai</i> Hirasawa and Yoshitomi	情報不足	準絶滅危惧	猪苗代湖で発見され, 2021年に新種記載された種で(Hirasawa and Yoshitomi, 2021), 止水性で水中の落ち葉や枝などの基質上で生活し, 遊泳はあまり巧みではない。県内では類似した環境での精力的な調査実施によって猪苗代町, 磐梯町で新たな生息地が発見された。一方, 模式産地では生息場所は限定され, 確認された個体数も大幅に減少している。 猪苗代にはアメリカザリガニが生息しており, また2023年にはウチダザリガニザリガニの侵入も確認されたことから(石山・石山, 2023), 近い将来, 本種の生息地への外来ザリガニ類の侵入も懸念される。外来ザリガニ類は底生動物を捕食することから, 本種の生息に大きな負の影響を及ぼすものと考えられる。 準絶滅危惧の定性的要件, 「個体数が減少している」, 「生息条件が悪化している」に該当する。	石山七海・石山杏好(2023)ウチダザリガニの猪苗代湖親友確認について(ポスター発表), 日本甲殻学会第61回大会(10月14日, 東京海洋大学品川キャンパス)。 Hirasawa, K. and H. Yoshitomi (2021) A new species of the genus <i>Hydrochus</i> (Coleoptera, Hydrochidae) from Fukushima, northeastern Japan, <i>Elytra</i> , New Series, 11: 301-305.
6	昆虫類	アザミウマ目	クダアザミウマ科	ミズナラオオアザミウマ	<i>Bactrothrips montanus</i> Haga and Okajima	情報不足	準絶滅危惧	自然度の高いミズナラ林に生じる枯葉に生息し, 枯葉の表面に生える不完全菌類の胞子を食べる(岡島・榎本, 2022)。枯れ枝に残された枯葉にしか生息しないが, 餌として特定の菌類の胞子しか利用しないためか, そのような枯葉に必ず見られる訳でもない。また, 枯れ枝に残された枯葉そのものが林内や林縁部には局所的にしか見られない。県内における分布は局所的で, 北塩原村(2ヶ所), 檜枝岐村(1ヶ所)の生息地でも個体数は極めて少ない(塘・志賀, 2021)。2024年に昭和村(2ヶ所)で新たな生息地が発見されたが, どちらの生息地もナラ枯れが進行中の場所である。ナラ枯れが進行すると, 本種の個体数は減少する可能性が高く, 生息適地もさらに減少すると考えられる。 準絶滅危惧の定性的要件, 現時点で絶滅の危険度は小さいが, 「分布域の一部において, 個体数が減少している」, 「生息条件が悪化している」に該当する。	岡島秀治・榎本雅身(2022)日本原色アザミウマ図鑑, 全国農村教育協会, 東京。 塘 忠顕・志賀澄歌(2021)裏磐梯地域のアザミウマ相, 福島大学地域創造, 32(2): 167-204.
7	鳥類	ツル目	クイナ科	バン	<i>Gallinula chloropus</i> (Linnaeus, 1758)	準絶滅危惧	絶滅危惧 I I 類	東日本大震災により沿岸部の休耕田などの湿地は大規模圃場整備により失われ, かつ秋から冬の越冬環境となる池沼の水は殆どが抜かれている現状からみても, 生息環境は極めて厳しいと思わざるを得ない。したがって定性的要件(大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。)に該当すると考えられる。	ふくしまレッドリスト2022

8	鳥類	キジ目	キジ科	ライチヨウ	Lagopus muta (Montin, 1781)	未掲載	絶滅	湯浅(1953)では、鬼面山、吾妻連峰(東大嶺)、安達太良山(鉄山)における目撃記録が記されており、日本野鳥の会群馬(2020)では、ライチヨウ「1945年頃まで燧ヶ岳で(ライチヨウの)親子連れが見られた」という地元住民の話があり(卯木1979、平井2002)、客観的資料は残っていないが、誤認する可能性のある種が同じ環境に生息しないことから、かつて本種が生息していた可能性を否定できないと思われると述べられている。2022年に福島県初記録として採用されたが、定性的要件(過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。)に該当すると考えられる。	卯木達明, 1979. 群馬の鳥を探る みやま文庫 76. みやま文庫, 前橋. 日本野鳥の会群馬, 2020. 群馬県鳥類目録 改訂版. 日本野鳥の会群馬, 高崎. 平井 敦, 2002. 尾瀬の麓の探鳥記. 卓企画, 前橋. 福田 浩, 1969. 繁殖期後期における尾瀬地方の鳥類 尾瀬地方一付鳥類調査小史一, 駒澤大学高等学校研究紀要第2集, 東京. 湯浅大太郎, 1953. 福島県の鳥, 日本野鳥の会郡山支部, 郡山.
9	淡水魚類	トゲウオ目	トゲウオ科	太平洋系陸封型イトヨ(在来)	Gasterosteus aculeatus subsp. 1	絶滅危惧ⅡB類	絶滅危惧ⅠA類	本種は会津盆地と猪苗代湖周辺、南会津町田島から会津若松市大戸までの阿賀川(大川)流域に広く分布し、場所により多くの個体が生息。しかしながら、現地調査の結果、猪苗代湖周辺と阿賀川流域の個体は、昭和期より会津盆地から人の手により移殖された個体群であることが判明した。在来個体群は、喜多方市と会津坂下町、会津若松市などの数か所の湧水地にごく僅かに残るのみで、生息地の大半は小規模な湧水地で個体数は多くない。本種が数多く生息するとされた会津盆地では、昭和期の圃場整備事業等による湧水地の埋め立てや湧水により、山中(1981)によって報告された多くの生息地が現在消滅した。会津若松市の白山沿は、生息地が県の天然記念物に、生息するイトヨが会津若松市の天然記念物に指定されているが、この地には開発で消滅した周辺生息地の個体が数多く放流された経緯があり、純粋な在来個体群とはいえない。現在残る小規模な在来個体群の生息地は、近年の異常気象による夏期の水温上昇や湧水量の低下、湧水などによる危機的な状況に陥る可能性を常に持ち、一部の生息地は生活排水の流入もあることから、本県に残る在来個体群は非常に危機的な状況にある。このことから、今回、ランクアップすることとした。	稲葉修(2010)会津地方(阿賀野川水系)の淡水魚類, 福島生物, (53):19-32. 山中 美.(1981)那河川, 阿賀野川両水域におけるイトヨの分布とその生態, 淡水魚, (7):106-110.
10	淡水魚類	スズキ目	ハゼ科	オオヨシノボリ	Rhinogobius fluviatilis (Tanaka)	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧ⅠB類	本種は河川上流から中流の特に早瀬に多いヨシノボリである。県内では、県東部と県南部の太平洋に注ぐ河川と、同じく太平洋に注ぐ県北部の阿武隈川本流とその支流に生息する。阿武隈川本流では信夫ダムより下流側に生息するが、かつてはその上流側にも生息していたものと思われ、阿賀野川においても、下流側(新潟県内)のダム構築以前には会津地方にも生息していた可能性がある。1990年代まで本種が比較的確認できた県東部の浜通り側河川では、個体数が激減している。その要因として、河川改修や流域広葉樹の伐採等による土砂の流入と川底環境の変化、生活排水の流入などが考えられる。本種は、河川環境の変化に極めて敏感に反応すると思われ、近年では震災からの復興工事が進む浜通り地域の河川において、個体数が大幅に減少した。現段階での個体数回復の兆しはなく、危機的状況が続いている。このことから、今回、本種をランクアップすることとした。	稲葉修(1999)福島県太平洋沿岸水系の魚類, 福島生物, (42):1-17. 稲葉修(2004)第5節 淡水魚類, 浪江町史別巻Ⅰ 浪江の自然:136-157. 稲葉修(2005)5. 淡水魚類, 原町市史第8巻特別編Ⅰ 自然:692-749. 稲葉修・倉石信(2015)相馬市の淡水魚類, 相馬市史第8巻特別編Ⅰ 自然:675-727.

11	両生類	無尾目	ヒキガエル科	アズマヒキガエル	Bufo formosus Boulenger, 1883	準絶滅危惧	準絶滅危惧	※亜種から種に格上げされたことによるもので、日本爬虫両棲類学会「日本産両生爬虫類標準和名リスト（2024年3月11日版）」に準拠した。	日本爬虫両棲類学会「日本産両生爬虫類標準和名リスト（2024年3月11日版）」に準拠。
12	爬虫類	有鱗目	タカチホヘビ科	タカチホヘビ	Achalinus spinalis Peters, 1869	情報不足	準絶滅危惧	情報が広く集まってきた結果、低標高地から高標高地における溪流・沢沿いの湿潤な樹林地に広く分布していることが分かった。しかしながら発見個体数が多いわけではなく、これらの環境において低密度に生息していることが想定される。近年の気候変動による乾燥化、あるいは河川の氾濫により、生息環境が著しく影響を受ける可能性がある。もともと人目に付きにくい種であり、人知れず個体数を減らす懸念があることから準絶滅危惧種へのランクアップをする。	稲葉修(1999)阿武隈山地の福島県地域における両生類と爬虫類, 福島生物, (42):25-34. 稲葉修・高橋修(2003)第4節 爬虫類, 浪江町史別巻 I 浪江の自然:131-135. 稲葉修(2004)福島県におけるタカチホヘビとシロマダラの記録, 野馬追の里原町市立博物館研究報告, (7):1-8.
13	淡水性 甲殻類	ホウネンエビ目	ホウネンエビ科	チョウカイキタホウネンエビ	<i>Eubbranchipus hatanaka</i> Takahashi and Hamasaki	情報不足	情報不足	学名が確定し、それに伴って和名を変更する。	Kitano, T., M. Tabata, N. Takahashi, K. Hirasawa, S. Igarashi, Y. Hatanaka, A. Ooyagi, K. Igarashi and K. Umetsu (2024) Integrating mitochondrial and nuclear genomic data to decipher the evolutionary history of <i>Eubbranchipus</i> species in Japan, Molecular Phylogenetics and Evolution, 108041. [https://doi.org/10.1016/j.mpev.2024.108041]